

テレビドラマ『ビューティフルライフ』 における“図書館”観の批判的検討

——図書館はどうみられてきたか・2——

佐藤毅彦

1. はじめに

「図書館司書の仕事であった本の片付等は、教員が少しの時間を利用して交代で整理に当たればよいと考え、図書館司書を廃止し、新たに悩み事相談員を設けた。」と群馬県太田市の市長、清水聖義は述べている¹⁾。1997年に学校図書館法が改正され、12学級以上の学校に司書教諭を配置する方向が明確になっているとともに、2002年からの新カリキュラムにおいて実施される「総合的な学習時間」との関連で、学校図書館が授業を活性化するために有効なものとして、注目される存在となってきている²⁾。その一方で、行政のトップが、司書の仕事は「本の片付等」であり、教員が交代で代行できる範囲のものとして認識し、学校図書館で「図書館司書を廃止」したケースが、「分権改革と教育行政」を扱った本の中で、自治体が行った「改革」の事例のひとつとして紹介されている。こうした施策が一定の理解を得ているように思われるのは、行政担当者ばかりでなく、住民の間でも、図書館のサービス内容や図書館員についての、具体的なイメージが共有されていないことが背景にあると考えられる。その原因として、個々人がゆたかな図書館利用体験を有していない状況とともに、メディアに登場する図書館や図書館員の描かれ方が影響しているのではないか。

映画を中心に映像メディアについて継続的な研究を続けている市村省二

は、映画に描かれた図書館のイメージとして、「静かにするところ」「心が落ち着くところ」「整然としたところ」「神聖（まじめ）なところ」「勉強するところ」「知識・情報を得るところ」「人と会うところ」などのタイプにわけて、それぞれに該当する作品をあげている。また、図書館員のイメージについては、「地味である」「親切である」「知的である」をあげているが、「親切」「知的」は「欧米映画に見られるもの」であり、「日本ではそのようなイメージで描かれたものは皆無に近い」としている³⁾。

また、伊藤敏明は、日本の映画に登場する図書館員について、「何らかの挫折なり鬱屈なりを抱えており、生気に乏しいが、腹では何を考えているかわからないような人間を描きたい場合の恰好の職業であるらしいのだ。」と述べている⁴⁾。

テレビドラマは、映画よりもはるかに多くの人たちが視聴していると考えられる映像メディアである。『ビューティフルライフ』は、2000年1月からTBS系列で放映され、平均視聴率は32.3%、最終回視聴率は41.3%で、いずれも過去十年間に放映された民放の連続ドラマとしては最高の数字を記録して話題を集めた⁵⁾。高視聴率の原因として、その「人物設定」をあげる分析もあり⁶⁾、ヒロインの常盤貴子は、車いすで生活していて、職業は図書館に勤めているという設定になっていたことから、図書館関係の雑誌にも、このドラマを意識していると思われる記述がみられる⁷⁾。中には、「見た司書の多くが、『図書館はあんなに暇な職場じゃない』『利用者にあんな対応はしない』と怒りを露にしました。」との指摘もあった⁸⁾。

筆者は、映像メディアにおける図書館のイメージについて検討する中で、テレビドラマの図書館観について、先に『素顔のままで』をとりあげて分析した⁹⁾。本稿では、「図書館はどうみられてきたか」¹⁰⁾というテーマでの継続的研究のひとつとして、『ビューティフルライフ』に描かれている、図書館・図書館員像について考察する¹¹⁾。検討にあたっては放映されたドラマの内容を基本とし、シナリオ（北川悦吏子『ビューティフルライフ シナリオ』2000年7月刊行、角川書店）とノベライゼーション（北川悦吏子『ビュー

ティフルライフ』ノベライズ：百瀬しのぶ、2000年3月刊行、角川書店）をあわせて使用した¹²⁾。

（なお、本研究に際し、甲南女子大学メディアセンター及び、羽衣学園短期大学職員の協力を得ました。）

2. テレビドラマの職業イメージと図書館

たとえば、1970年代のテレビドラマを分析の対象とした『テレビドラマの女性学』では、テレビドラマの主要な女性の登場人物の半数以上が有職者であり、その職業は、「第一は、美容師、教師、デザイナー、歌手などの専門的職業である。そのほとんどは従来、女性向きとされてきたもので、とくに目新しいものはない。第二は、商店、飲食店、旅館などの自営業を営む経営者である。小さなバーのママなどもよく出てくる。そして第三は、店員、OL、家政婦等、専門職以外の雇われている人である。」「ドラマの中の女性の職業は、やはり、これまでの通念として女性向きとされているものがほとんどで、通念を打ち破る新しいモデルを提示するというようなことはあまりない。」と述べられている¹¹⁾。

また、1980年代後半から1990年代のドラマを主たる対象とした『20世紀テレビ読本 踊る！お仕事ドラマ』では、「ドラマの主役たちの職業」を、病院に関連したものを中心に整理している。その中で、病院関係を、外科医、監察医、内科系、看護婦、医学生・研修医、ラブロマンス（医者が結婚相手）にわけ、さらに他の職業として、マスコミ、司法関係（弁護士など）、サービス業（ホテル・デパート・ステューワーズなど）、をとりあげて、それらについて分析を行っている²⁾。同書では、「少し前までのテレビドラマの主人公は教師、刑事、医者でした。」とされ、「それはテレビが家族揃って見るものであったからで、この3つの職業が誰にもわかる主人公であった」ことによるものであり、「テレビが一人に一台になると、ドラマの主人公の職業も多様化して」きたことが指摘されている³⁾。

テレビドラマの中での職業の扱いについては、必ずしもその実態を正確に反映させることが、考慮されているわけではない。『テレビドラマの女性学』では、「登場人物の職業が明示されるということは、その人が、どのような経済的基盤をもって生活しているかが示されるということで、その人物の現実味が増す。しかし、その仕事場の行動は、例えば会社で電話の応対をしているとか、店の客に品物を包んで渡すとかいった形で、ドラマの場面展開のための状況として使われることが多い。そして職業上の行動自体がドラマのテーマや人物達の直面する問題に直接かかわること、仕事に由来して生ずる問題が扱われることは比較的少ないのである。言いかえると、その人物の職業人としての側面を前面に出した描き方は少ないということである。また男性よりも女性のほうが、その側面から描かれることが少ないようだ。」とされている⁴⁾。

また、同書は、1970年代の「日本のテレビドラマの中で、どのような女性の姿が描かれてきたか」について、分析している⁵⁾。それによると、「今のところ、日本のテレビドラマは、自分自身の道を生きる道を選ぶ女性よりも、夫や子どもを通じて生きようとする女性にとっての心やさしい友である様だ。」「テレビドラマは、まだまだ、旧来の男女役割分業観に基づいたステレオタイプ化した女性像を描いていることが多い。しかし少しずつ新しいものも出はじめている。」とされている⁶⁾。

一方、ある事象についてのメディアにおける取り上げ方は、「特定の個人でなく、その属性や地域を偏った立場で報道したり、また表現したりすることも多い。この場合は、事件報道よりも、ドラマやバラエティ、CMなどに日常的に現れることが一般的である。というのも、それは、意図して偏った表現をするというよりも、一般社会の見方や価値観が、そのまま、あるいは、凝縮されて表現される場合が多く、製作者たちは、その偏りや誤りに気づかない場合が多い。」「このように、いつも繰り返される偏った表現のことをしばしば『ステレオタイプ』表現という語で表してきた。」⁷⁾といわれているように、ドラマにおける職業イメージもステレオタイプのものになりがち

な傾向がみられることは否定できない。

図書館や図書館員が登場するテレビドラマは、これまでもいくつかあったが、約20年前（パートⅠ（1979年1月13・20・27日）、パートⅡ（1980年1月19・26、2月2・9日））に放映された『阿修羅のごとく』（NHK）は、ステレオタイプの図書館員が登場する作品である。脚本を担当した向田邦子（1929-1981年）は、東京都出身で、実践女子専門学校（1950年）卒⁹⁾。この作品は、『NHKドラマ館 名作シリーズ』として、近年にも再放送（パートⅠ（1998年4月4・11・18日）、パートⅡ（1999年7月10・17・24・31日））されている。また、舞台でも、テレビドラマ化された際のスタッフのひとり、和田勉の演出によって上演されている⁹⁾。

テレビドラマ『阿修羅のごとく』では、いしだあゆみが図書館に勤める、四人姉妹の三女滝子を演じているが、その冒頭の部分は、次のような描写からはじまっている。「コートの前を立って竹沢滝子（30）が古ぼけた建物に入って行く。ひつつめた髪。化粧気のない顔にめがね。」「建物は区立図書館。看板の字も読めないほど——見捨てられ、忘れられたオールド・ミスのように寒々とした姿で建っている。」¹⁰⁾また、姉妹の会話で、姉の綱子が『『司書』と興信所っての、どっか似てんのよね。キイツとなって、トコトン、しらべるってとこが』と発言している場面もある¹¹⁾。

『阿修羅のごとく』の図書館でのシーンには、冒頭の部分のほかは、調べものをしているところに父親がやってくる場面がある¹²⁾。そのほかには、電話をかける場面に背景として数回登場する程度で、具体的に図書館員として業務の内容が、視聴者に伝わってくるようなシーンはほとんどない。

このドラマでの演技については、「三女の滝子（いしだあゆみ）は男にもてないことの劣等感から自らの殻に閉じ込め、陰険で暗い性格を有している。このキャラをいしだがとても好演してみせた。」のような評価も残されている¹³⁾。

近年のテレビドラマで、図書館員がヒロインの作品としては、『ガラスの

靴』(1997年 日本テレビ 加藤紀子が図書館員を演じるシンデレラストーリー)¹⁴、『青の時代』(1998年 TBS 奥菜恵が図書館でアルバイトする短大生を演じる)¹⁵などがある。また、図書館が登場する作品は、『魔女の条件』(1999年 TBS 松嶋菜々子と滝沢秀明が学校図書館でメールを交換し、館内で一夜をともにする)、などをはじめとしていくつか存在する¹⁶。

ただ、こうした作品に登場する図書館や図書館員が、過去のドラマを参考にして制作されているとは、必ずしもいえない。たとえば、図書館でのプライバシー保護については、これまでもさまざま作品で問題となってきたが、『雨の脅迫者』(1989年 フジテレビ)では、利用事実の問い合わせに対して、図書館員が断っているシーンがある。しかし、その事実が生かされず、時代的にはその後に制作されたものでも、図書館でのプライバシーの扱いが問題となったケースがある¹⁷。

この他の映像メディアでは、日本推理作家協会賞を受賞した東野圭吾原作の『秘密』が、1999年に広末涼子主演で映画化された。原作では登場人物のひとりが「図書館員に相談する」というストーリーが、映画では図書館員が登場せず、自分で資料を調べるといった描写になっていた¹⁸。

演劇では、宝塚歌劇の『再会』で、ヒロインのサンドリーヌ(月影瞳)が図書館員の設定になっていた。このキャラクターについては、「お堅い図書館の職員」サンドリーヌは、「真面目すぎて他人を不愉快にする女性」とであるとされていた¹⁹。「図書館ではじめてジェラルドと会うサンドリーヌは、ボサボサの巻き毛カツラ+お勉強メガネ+紺のカーディガン+腕ぬき+白のフレアスカート+紺のハイソックスと、トップ娘役史上おそらく前代未聞のダサダサなコーディネートで登場し、カニ歩きをしながら終始グラグラ、ユラユラと揺れている。」²⁰このような、宝塚では「前代未聞のダサダサなコーディネート」のヒロインが「図書館に勤めている」という設定になっているということは、図書館員のステレオタイプイメージが、ある程度、観客の間に共有されていると、制作者のがわが考えていることを物語っている²¹といえよう。

近年のテレビコマーシャルで、図書館が登場するものには、パワーアステル、マクドナルド、キャンパスリップなど、いずれも学生がメインキャラクターに設定されているものがあつた。図書館内に設置されているコンピュータの端末を使って、松たか子が電子メールを送信するCM（1997年、NTT）など、新しい機器は画面に登場しているが、図書館や図書館員自体に関するイメージは、全体としては、大きく変わったとはいえない状況にあつた。そうした中で『ビューティフルライフ』の放映は、開始された。

『ビューティフルライフ』の放映中に掲載された、「ドラマの中の職業≡旬のお仕事?」というタイトルの、堀井憲一郎「ホリイのずんずん調査」（『週刊文春』連載）では、このドラマの主役の職業である「カリスマ途上の美容師」と「図書館司書」について、「なかなか微妙な職業で、どちらも特殊ではないけれど、さほどありきたりではない。」としている。堀井は、「過去5年半で319のドラマの主人公」の職業を男女別に調査したところ、「男の美容師と女性の司書は過去3人ずつ出た」という²⁾。分析の対象となったドラマの範囲が、BSや再放送も含むかなど、具体的にくわしく示されていないが、登場人物が図書館に勤めているという設定のドラマが、最近でも、ある程度存在していたことは認められる。

3. 間違いだらけの『ビューティフルライフ』

『ビューティフルライフ』の脚本を担当した北川悦吏子（1961年生）は、岐阜県出身で、早稲田大学文学部卒¹⁾。『ビューティフルライフ』で「向田邦子賞」「橋田賞」を受賞している²⁾。彼女が初めて連続ドラマの脚本を担当した『素顔のままで』（1992年 フジテレビ）は、安田成美が図書館員を演じるストーリーであつた。浦安市立中央図書館で撮影されたこのドラマの図書館と図書館員像については、同じ時期に放映されていたCMの分析とあわせて、先に論じた³⁾。

前節では、テレビドラマでのある職業の描かれ方が、実態とは異なるもの

になったり、ステレオタイプの描写になったりしがちな傾向がある事実是否定できないことにふれた。したがって、細かいところまで、ドラマと現実とが異なっている箇所をとりあげてみてもきりが無いが、『ビューティフルライフ』について、図書館活動の本質と関わる違いをいくつか指摘する（なお、登場人物の表記については、基本的に芸名であらわす）。

ドラマの冒頭で、図書館にやってきた木村拓哉がカウンターに行く途中で、年配の利用者がコンピュータのマウスを手にもって空中で操作しようとしているのを見て「それ、下においてやるんですよ」と注意する場面がある（第1回放送）。

ここで、画面に映っている検索装置は、キーボードとマウスで操作する機種になっている。この機種は大学図書館などでは広く普及しているが、公立図書館では、高齢者やパソコンのキーボードの扱いに慣れていない利用者が操作しやすいように、画面にふれることで入力できる機種が多く使用されている。このドラマは、ヒロインが車いすで生活している設定になっていることが重要なポイントとなっており、「バリアフリー」ということばも、セリフの中に何度か登場する。そうした中で、図書館の検索装置が、必ずしもバリアフリーとはいえないものになっているだけでなく、その操作に戸惑っている高齢の利用者に対しての揶揄的な発言（シナリオ・ノベライゼーションにはない）がそのまま放映されているのは、スタッフに、図書館における真のバリアフリーとは何かということが、理解されていないことを示している。

ヒロインの常盤貴子が勤めているのは「区立宮の森図書館」という設定になっている⁴⁾。この図書館の職員の休日について、友人の女性図書館員が「日曜日ともう一日、ウイークデイ休めるから。」と発言しているシーンがある（第6回放送）。これは、シナリオでもおなじ発言内容になっている⁵⁾。現実には、公立図書館で全面的に日曜休館というところはほとんどない。職員の出勤日と図書館の休館日とは完全に一致しているわけではないが、このような発言が放映されることによって、「図書館員は休みが多くてラクそうな

仕事」というイメージが強調されることになる。なお、ノベライゼーションでは、同じ部分の会話は「休館日ともう一日、ウィークデイ休めるから」⁶⁾となっており、別のところに「図書館が休みの月曜日」という表現がある⁷⁾。

また、図書館資料の返却期限について「返却、1週間後になります。」というセリフがある（第3回放送）。これはシナリオ・ノベライゼーションにはないので、現場でのアドリブかと思われるが、公立図書館の貸出期間は2ないし3週間のところが大半である。また、貸出処理のために、資料のバーコードをスキャナーで読み取る場面が出てくる。実際の図書館では資料管理用に、その館独自のバーコードを資料に貼付しているが、ドラマの中で、出版物の販売管理目的でつけられているバーコードを読み取っているシーンがあった（第2・3・6回放送）。

これらはいずれも些細なことではあるが、こうした単純な事実について、現実の図書館の実態とは異なる内容が、そのまま放送されているということは、ドラマ制作の現場で、図書館に対する関心が低く、スタッフが注意を払うべき対象と認識されていないことを示している。図書館については、医療監修やヘアメイク指導のような、専門の知識を持ち、その実態をよく知る人物によるアドバイスが、必要なものとは考えられていないということである。

また、このドラマでは「図書館は利用者が少なくヒマである」というイメージを強調していると思われるシーンが複数あるが、その点と、図書館における利用者のプライバシーの扱いについては、図書館員の専門性とあわせて、後にふれる。

4. 『ビューティフルライフ』をめぐる言説

「関西の書店や駅売店で入手しやすい」テレビ情報誌は11（うち週刊2）誌あるとされている¹⁾。そのうちの週刊で刊行されている2誌に『ビューティフルライフ』に関連した内容のページが連載されていた²⁾。このドラマが

放映されていた時期にこうした扱いをされたものは他にはなく、期待の大きかった作品であることがうかがえる。

ドラマの内容については、各紙・誌で多数紹介されている。中でも、主要な登場人物のひとりが、車いすにのって生活している障害者のヒロインであることに注目した記事が多い³⁾。また、『五体不満足』の著者、乙武洋匡が早稲田大学を卒業しようとしていた時期と重なったこともあり、そのことと関連させた取り上げ方をしたものもあった⁴⁾。乙武本人は『朝日新聞』紙上で、「演技がナチュラルなので、『あるよね、こういう話』と感情移入ができてしまう」「障害者の取り上げ方も、同情を誘うのでなく」「主人公の対応にも好感がもてます。」と述べている⁵⁾。

キャスティングについては、「最終回視聴率が41パーセントというのだから驚く。すごいな。ドラマとしては、古典的な割には地に足が着いていない中途半端なものであったが、こうなるとやっぱりドラマってキャストなんだなあと思わざるを得ない。」との見解があった⁶⁾。また、主演の木村拓哉に焦点を当てた記事も、特に若い女性を主要な読者層としている雑誌には、多数掲載された⁷⁾。

杉原秀一は『ビューティフルライフ』が高視聴率を記録した背景について、「マーケティングの手法『AIDAの原則』によって解析」することを試みている。そこでは、Attention（注意）「キャスティングの豪華さ」、Interest（関心）「身体障害者とのラブストーリー」といった「意表を突く着想の素晴らしさ」、Desire（願望）「経験したことのない夢物語」「幅広い視聴者層を引き込むための重要なシチュエーション設定」、Action（行動）「継続して見させるための手法として」「伏線をうまく使っている」、の4要素によって、ドラマの背景が説明されている。この文章では、職業としての美容師や、車いすで生活する「100 cmの高さからの世界観」などについても、くわしく解説されているが、図書館や図書館員については、まったくとりあげられていない⁸⁾。

ドラマと図書館との関連についてふれたものもいくつかある。放映開始直後に、このドラマのストーリーについて、映画『ある愛の詩』との類似性を指摘する記事があり、両者とも、ドラマの冒頭で、図書館での出逢いのシーンがあることが、根拠のひとつにあげられていた⁹⁾。

また、図書館員の業務に関連して、林真理子のエッセイに、「実はこの常盤貴子ちゃんは、図書館に勤めている。カウンターに座って、本の貸し出しをしたりする人である。」「ハヤシさんの本は人気があるから、いつも貸し出し中なんです。名前をいってくだされば予約リストに入れておきますから」とのシナリオを、脚本家の北川悦吏子に電話で提案したが、「もうそういうシーン、終っちゃったの。」と言われ、「その時、私、『さくらもこの本、ありますか』っていうふうにしたんだけど」というやりとりがあったことが紹介されている。実際のドラマでは、このようなセリフは使用されなかった¹⁰⁾。

『週刊プレイボーイ』には、図書館で女性をナンパすること、について扱った記事が載っている¹¹⁾。もっとも、都市部の図書館が、ナンパのスポットになっていることをあらすじ記事は、すでに十年以上前の雑誌にも掲載されている¹²⁾。

『ビューティフルライフ』の脚本を担当した北川悦吏子にインタビューした記事もいくつかある。そのうち、『週刊朝日』に掲載されたものは、林真理子が聞き手となっている。林の「昔、NHKで斎藤とも子さん主演の車いすの人の青春を書いたドラマがあつて……。」という発言に対して、北川悦吏子は「私もあの山田太一さんのを参考に見たんですけど、まず車いすからして、すごく変わったなと思いました。今はあんなに大きくないし、重くないんですよ。それに、気の持ちようが違ってきてるのかなと思う。あのころは、外に出ちゃいけないみたいなのが あつたんじゃないかなあ。」と答え、車いすでのライフスタイルには、時代による変化がみられることを取材によって認識し、それを脚本に反映させたことを述べている¹³⁾。

ここで話題になっているのは、『阿修羅のごとく』とおなじく、約20年前

(1979年11月24日)にNHKで放送され、近年にも(1999年6月5日)再放送された、山田太一脚本・鶴田浩二主演の『男たちの旅路 第4部 車輪の一步』である。この番組は、警備会社を舞台に戦中派の中年と戦後生まれの若者の断絶と共感を描いた傑作シリーズとされ、『車輪の一步』には、車いすで生活する若者が登場する。その人たちのうち何人かの職業は、印刷会社でガリ版印刷に使用するための原紙切りをしている、という設定で、車いすで外の世界に出て行くことに対する障害と心理的な抵抗について描かれている¹⁴。

向田邦子賞受賞記念として、北川悦吏子関連の特集を組んでいる『ドラマ』2000年6月号では、北川悦吏子は編集部のインタビューに答えて、『ビューティフルライフ』の企画段階から脚本として完成するまでのプロセスについて、くわしく述べている¹⁵。

車いすのヒロインを登場させた事情については、「子供をベビーカーに乗せてるときに、車いすを思いついて、車いすに乗ってるすごく気の強い女の子を書きたいなどと思って、それは常盤さんにぴったりだな」ということから発想したと発言している。また、インターネットで「ホームページを見つけて、質問するといろんな人が答えてくれる。」ことや、自分で車いすに乗って地下鉄の駅へ行ったこと、などの取材方法をとったと話している。木村拓哉の職業である美容師については、「美容師もそれでいけるだろうと、美容師を検索して、掲示板を見ても充実してない」ため、直接会いに行き、有名な美容室も取材し、ミーティングも見せてもらったこと、などが紹介されている。「わりと体育会系で」「接客業だから礼儀正しい」ことも指摘されている。また、他に「取材が必要だったことは？」と尋ねられたのに対して、常盤貴子が演じた「杏子の病気」をあげ、「先生に聞いて、こういう病気がありますとレクチャーを受けたりしました。書いたものを見てもらって、おかしくないかチェックしていただいた」ことも述べている。そうしたことが、番組のキャプションで、医療監修・ヘアカット指導に個人名が表示されている事実につながっていると考えられる。一方で、図書館・図書館員につ

いてこうした取材が行われた事実は、語られていない¹⁶⁾。これは、図書館や図書館員については、カウンターの外から見たイメージだけをもとにして脚本を書いても、視聴者のもっているイメージと大きく異なることにはならないであろう、と、脚本家が考えていることを示している。車いすをめぐる状況の時代的变化や美容師・美容室の実状、医療に関する情報などについては、情報収集や取材の結果を脚本に反映させている一方で、図書館についてそうした配慮がないのは、図書館はとくに取材が必要となるような施設ではない、とみられているということなのではないか。

5. 『ビューティフルライフ』の図書館員

伊藤敏朗は、「映画というのは、それが虚構であるがゆえに、より‘それらしく’描こうとするために、世間のイメージとかけ離れた突飛な人物像や職業感といったものは描かないものだし、それゆえに受け手の側はやすやすとその設定と物語を受け入れるのであって、映像に表れた“像”とはその意味において、やはり広く社会に平均して敷衍されている、多くの人々の心の“鏡”だと言えるのである。」「図書館界としても、このような偏見に満ちた映像メディアの描写を看過していて良いのだろうか。」と述べている¹⁷⁾。

テレビドラマ『ビューティフルライフ』では、図書館での場面や図書館員・司書に対する言及が何度かでてくるが、その中でも強く印象付けられることのひとつは、「図書館は利用する人が少なく、図書館員はヒマ」ということである。番組がはじまった直後の場面では、「すぐ裏の、青山学院の学年末試験」で学生がコピーをとるために並んでいる姿が映されるが、数分後には、「ヒマだねえ。ヒマなのに寝ちゃいけないって、ゴーモンだね。」とヒロインの常盤貴子が発言しているシーンがある（第1回放送）。シナリオでは、このとき、友人の女性図書館員がカウンターの下でマニキュアを塗っているのを見てもヒロインは何も言わず、「(いつものことってことでしょ)」という状況説明が、ト書きに書かれている¹⁸⁾。

そのすぐ後には、常盤貴子が、カウンターで本（画面に映るのは『あたまにかきのき』という書名の児童書）を読んでいる、「おわっちゃった」と言っ
て本を閉じたところに友人が訪ねてくるシーンがある（第1回放送）³⁾。さら
に、木村拓哉が忘れていった資料を届けに、昼休みに外出したシーン（第
2回放送）では、電話で連絡をとった、図書館に残っている友人に「午後、
戻るの少し送れてもいいから」と言われている。

また、常盤貴子は、事前の十分な予告もなく、アメリカ西海岸の旅に2週
間も出かけてしまう（第3・4回放送）。旅先から送られてきたはがきをみ
て、兄が心配して、自分もついていけばよかったと言ったのに対して、父は
「じょーだんじゃないよ。2週間も店開けられたら、こっちは区民図書館じ
ゃないんだからあがったりだよ」（第4回放送）と怒鳴っている⁴⁾。それは、
裏を返せば、図書館なら、急に一人が不在になっても差し支えないよう職場
だとみられているということである。

友人の女性図書館員は、昼休みに職場を抜け出して、ヒロインの兄のお見
合いを偵察に行ったり（第3回放送）、カウンターで着物のカタログを見て
いたり、図書館にやってきた木村拓哉を「話し相手いなくて（引用・注：こ
のときヒロインは、アメリカ旅行中で不在）、ヒマなのよ。」といて、カウ
ンター内での私的な会話に引き込む場面もある（第4回放送）。

こうしたシーンに対しては、視聴者からの反応があったと思われ、TBS
の公式HPには、次のようなQ&Aが掲載されていた。

Q「ビューティフルライフには、図書館が出てきますよね。その図書館
は、どこの図書館をモデルにしていますか。あれほど楽な仕事をする図書館
はないと思いますが…。」

A「モデルはありません。恐らく「ちょっと息抜きをして話している」シ
ーンを抜き出して集めているのでいつもサボっているみたいですが、それ以
外の時にはバリバリ仕事をこなしてる、と思います。」⁵⁾

ヒロインが勤務する図書館の建物には、「宮の森図書館」との看板がかか
っているところが画面に映る。シナリオでは、「区立宮の森図書館」という

名称が使われており、ノベライゼーションにも、「杏子は、図書館司書として、ここ、区立宮の森図書館に、勤めている」とあることから、ヒロインは「区立図書館」の「司書」という設定になっていると考えられる⁶⁾。

主役ふたりの会話には、「あたししがない図書館司書だし」「そんなこと、全然思っていないでしょう、ねえ。図書館司書ってさあ、案外むずかしいしいんでしょ。おれ、あんたとつきあいだしてから、けっこうまわりに聞いたんだけどさ。っていうか、案外プライドもってやってんじゃないの。っていうか、逆にさ、美容師とかのほうが、バカにしてんじゃないの。」「何で。んなわけないでしょう。」(第5回放送)といったやりとりがある⁷⁾。

障害者の友人の「自分だって、図書館司書の資格とって、毎日、働いて」(第6回放送)⁸⁾や、ヒロインの兄の「あたまだって、オレと違って、図書館勤めるくらい、いいんだよ。」(第7回放送)⁹⁾などのセリフにも示されているように「司書」という資格が存在し、その取得のためには一定の知識が必要であることは認識されている。しかし、具体的に図書館現場で「司書」がどのような専門的仕事をしているのか、資格をとる必要があるのは、どういった仕事を担当しているからなのか、などについては、ほとんどわからない。実際に、テレビ画面に映る仕事の内容も、カウンターでのやりとりが大半で、他には、利用者に尋ねられて、該当する資料の置いてある場所を示しているシーンが数回でてくる程度である。もちろん、テレビドラマでは「職業上の行動自体がドラマのテーマや人物達の当面する問題に直接かかわること、仕事に由来して生ずる問題が扱われることは比較的少ない」¹⁰⁾し、美容師に比べても、実際に図書館司書の専門的な仕事の内容を、具体的にわかりやすくストーリーに組み込むことは、困難であると思われ、結果的に「図書館って利用者が少なく、ヒマそうな職場」という印象が、強く記憶に残るストーリーになってしまっている。

日本図書館協会が採択している『図書館の自由に関する宣言』では、「図書館は利用者の秘密を守る。」ことを主文のひとつとしてとりあげてい

る¹¹⁾。『ビューティフルライフ』に登場する図書館員が、利用者のプライバシーに関連してどのような扱いをしているかについては、貸出記録を私的に利用しようとした¹²⁾、利用者の行動に対する問い合わせに対する対応¹³⁾などのシーンにみられるように、意識的に「利用者のプライバシーに配慮する」姿勢は希薄である¹⁴⁾。

また、図書館を訪ねてきた、ヒロインと同じように車いすで生活している友人との会話で、「同じマンガばっか借りてくじいさんがいるのよ」「不思議じいさんっていったけど」（第5回放送）のように、図書館員の常盤貴子が、利用者の借りた資料の内容に関して、やや揶揄的に、話している場面がある（この部分は、シナリオやノベライゼーションにはなく、撮影現場でのアドリブと思われる）。図書館員が、利用者の利用している資料の内容について、安易に友人と話している場面が放映され、視聴者に「そういうことって、ありそう」と思われることによって、利用するがわの、図書館員に対する信頼感が薄らぐことの可能性が、ほとんど考慮の対象になっていない。なぜ、図書館員の仕事に専門的な資格が必要なのか、その際に必要な知識はどういった内容なのか、という点に注意が払われていないことが、こうしたシーンに象徴的にあらわれている。

図書館や司書がドラマに登場することの評価については、二通りの見方がある。ドラマの図書館や図書館員にはステレオタイプな表現が多く、そのことによって、固定化されたイメージが定着するとして、否定的にとらえる考えがある一方、図書館や図書館員が、多くの視聴者をもつテレビというメディアに登場すること自体を評価し、その存在をより広い範囲に認識してもらう方途としての有効性を、積極的に認めようとする考えもある。

ステレオタイプイメージとその拡散については、たとえば、アメリカでのテレビ草創期における黒人キャスト番組制作打ち切りをめぐる論考がある。『エイモス・ン・アンディ』という番組に対して、NAACP（全米有色人種向上協会）が放送中止を求める訴訟を起した事件について検討したもので、こ

のときの論点は、放映された番組が黒人のステレオタイプイメージを広め、定着させてしまうのを防ぐことと、テレビ番組への出演によって、黒人雇用の拡大がはかれること、のどちらを優先して考えるべきか、というところにあった。長期的に見れば、協会の方向性は説得力を持つが、当時（1950年代）の黒人の置かれていた状況を考慮すると、単純には判断できないことが紹介されている¹⁴⁾。『ビューティフルライフ』についても、日本の図書館をとりまく現在の状況をどう考えるかによって、その評価は異なったものになるだろう。たとえば、ある国の人たちが抱いている外国イメージとその国のメディアが描いている外国・外国人像との間には、かなりの相関関係があるとされ、「映画・テレビドラマ・単行本などに描かれる外国・外国人は、情報制作者の抱いている“ステレオタイプ・イメージ”の反映である場合が多いので、容易に変化しない。」といわれている¹⁵⁾。利用経験の乏しい人たちにとっては、メディアに登場する図書館のイメージがステレオタイプのものばかりだと、図書館に対する見方が、容易には変わっていかないことが考えられる。

6. おわりに

様々な新しいメディアが、社会に普及しつつある現代の状況においても、映像メディアの中で、テレビは一定の影響力をもっていると考えられる。テレビドラマは、現実とは異なるものであるとはいっても、やはりその影響を無視できないことがある。テレビドラマでの職業の描かれ方に対する批判が、メディアに取り上げられたケースとしては、近年、『心療内科医・涼子』に対して現場の医師や日本心療内科学会・「医事指導」の東邦大大森病院心療内科などの担当者から、テレビ局サイドに抗議があったことが報じられている例がある¹⁾。図書館についても、NET『特別機動捜査隊』をめぐる練馬テレビ事件や、NHK連続ドラマ『びあの』の事例はよく知られている²⁾。

高視聴率番組『ビューティフルライフ』の中に登場していた図書館や図書

館員のイメージは、これまでステレオタイプとされてきたものと大きな差はないものであったと考えられる。「司書」資格が存在し、その取得のためには一定の努力が必要であることは認識されているが、画面にあらわれる具体的な仕事の内容はカウンター業務がほとんどであり、利用者が少なくヒマな時間が多いことが印象に残るものになっている。脚本家である北川悦史子にとっても、図書館は注意を払うべき存在として、強く意識されてはいないし、番組のエンディングテーマにあわせて、キャプションでキャストやスタッフが紹介されていく中で、「医療監修」「ヘアカット指導」は個人名が表示されるのに対して、図書館については、そうしたたぐいのものは存在しない。

多くの関連資料で指摘されたように、このドラマの設定は、障害者が登場するラブストーリーで、その相手役の職業が美容師であることを中心に物語が展開する。ヒロインの職業は、ドラマの冒頭でのふたりが、道路上→駐車場→図書館のカウンター、と、連続して偶然に出会う状況が可能になるための伏線として、図書館員に設定されていると思われる。また、職員がカウンターで座って対応しているケースが多いことから、図書館は障害者の職員が、車いすにのったままで、接客のカウンターで仕事をしていても不自然ではない職場である。さらに、公共の機関として、障害者の雇用に対して、積極的に取り組んでいることを示している、とも考えられる。

図書館は、博物館や美術館などと異なり、同じ利用者が一定の周期で何度も来館する利用形態（資料を借り出し、一定期間後に、返却する。多くの図書館で、貸出期間は2～3週間である。）から、同じ利用者が何度も来館することが、不自然ではない施設でもあり、それは友人が何度も来館して、館内でヒロインと話をするストーリーを、無理のないものにしていく。資料を館外へ貸出するための手続きが行われるカウンターは、図書館員と利用者とのコミュニケーションの場としても、重要な意味を持っているが、このドラマでは、ヒロインを尋ねてやってきた、友人・知人と会話をするのに適した場として利用されている。実際は、カウンターまわりで、職員が知り合いの利

ユーザーと私的な会話を交わしているというのは、他の利用者が職員に話しかけにくくなってしまうため、戒めるべき行為であるのだが…。

テレビドラマの図書館や図書館員の描かれ方が、現実の姿と異なるものになっていると、それがそのまま受け入れられてしまうことにより、図書館に対する世論形成に影響してくることが考えられる。

そうした点について、伊藤敏明は、「ではどう解決するか。図書館員が、颯爽と難事件を解決し、悪党をなぎ倒して大金持ちになった上、美女（男）に囲まれる映画を日図協で作れば良いのだが、実際のところは、やはり地道な広報活動を重ねていくしかないのだろう。ただ、これまでの図書館のPRが、利用者を対象としていた（当然だが）のに対し、これからのPRは、図書館界内部の人間の意識の変革とか、有能な人材の獲得といったことをも戦略に入れて、様々な場面へパブリシティーを打つことが、より意識されて良いのではないかと思う次第である。」と述べている³⁾。

たとえば、最近では、NHK連続ドラマ『私の青空』の脚本・内館牧子、ヒロイン・田畑智子、ヒロインの息子役・篠田拓馬、の3人に、日本栄養士会から感謝状が送られたケースがある。新聞報道によると、「ドラマの中で、子どものころからの食生活の重要性と、栄養士への道、さらには管理栄養士について広く啓発してくれた——というのが、贈呈の理由。」とされている⁴⁾。こうした望ましい方向が、なぜ図書館については実現しないのか。

先日の読売新聞一面トップ記事に、「問題教師は“教室追放”」という大きな活字が踊っていた。「文部省が法改正方針」「授業がなげやり 子ども圧迫言動 関連施設へ配転」という見出しに続いて、文部省が「適切な授業を行う能力がないなど、指導力を著しく欠く教員を教職以外に配置転換する」法改正案を国会に提出する方向であることを報じている。その移転先には「県立の図書館や教育センターといった児童・生徒との接触がない教育関連の施設」が候補としてあがっている⁵⁾。この施策の実現可能性や、それ自体の評価は別として、転出先に「県立の図書館」がまっ先にあがっているということは、文部省が、教職「不適格者」でも「県立の図書館」なら、なんとか勤

まるのではないかとみなしている、ということである。また、新聞報道でこの記事が一面のトップに掲載され、その施策を批判するニュアンスが感じられない扱い方をしているということは、図書館がこのような人材の転出先になることを、マスコミが容認し、また、読者もそのことに対して強く反対はしないであろうと、報道するがわが考えている、ということでもある。

「児童・生徒との接触がない教育関連施設」への転出とはいっても、県立の図書館にも児童・生徒は利用者としてやってくる。また、利用者とのコミュニケーションは、現代の図書館サービスを展開する際には重要なポイントでもある。それを考慮すると、このようなかたちで配転されてきた職員が、実際に図書館の業務の中で、十分なパフォーマンスを遂行できるのかどうか。そのことに対する疑問が、この文部省の施策や報道姿勢からは感じられない。それは、実際に、「県立の図書館なら、そうした人材でも何とかなるような職場や業務内容なのでは…」と文部省にも、マスコミにも、「みられて」いることを示している、といえるのではないか。

図書館や図書館員のイメージは、その影響が実際の図書館活動を支える部分にまで、及ぶこともある。図書館のイメージを形成するいくつかの要素の中で、メディアの中の図書館イメージを分析し、「図書館はどうみられてきたか」を検討することで、今後の図書館経営にとって、有効な素材となる見解を提示したいと考えている。

注

1. はじめに

- 1) 清水聖義「首長部局からの評価と政策提言」西尾 勝、小川正人編著『分権型社会を作る⑩分権改革と教育行政～教育委員会・学校・地域』2000、ぎょうせい、pp. 229-236

『日本経済新聞』2000. 9. 25, p. 31, に紹介されている, 日本経済新聞社産業消費研究所の調査によると, 「効率性」で「注目される」[群馬県太田市。「行政評価や企業会計方式も今年度から導入した。」とのことである。

- 2) 図書館教育研究会『新学校図書館通論』1999, 学芸図書, p. 1, 「まえがき」には, 「2002年度から始まる完全学校週5日制に合わせた新学習指導要領で

は、小学校3年以上では自分で課題を見つけ、学び方を身につける『総合的な学習の時間』が新設されることになっている。この総合学習のねらいが十分に達成されるためには学習情報センターとしての学校図書館の役割にまつところが大きい。」とある。

- 3) 市村省二「映画で見る図書館・図書館員のイメージ」神奈川県内大学図書館相互協力協議会平成11年度第2回実務担当者会(1999.12.17:フェリス女学院大学緑園キャンパス)発表要旨
- 4) 伊藤敏朗「映像表現における図書館と図書館員像に関する論考」『視聴覚資料研究』(私立大学図書館協会東地区部会研究部視聴覚資料研究分科会) vol. 2, no. 3, 1991. 1, pp. 120-123
- 5) 『サンケイスポーツ』2000. 3. 28, p.26
ただし、『日経エンタテインメント!』no. 40, 2000. 7, p. 44, によれば、最終回視聴率が40%を超えたのは、関東地区のみであり、北部九州地区31.9%, 名古屋地区26.8%と「東京を舞台にしたおしゃれなドラマは敬遠されがち」で「全国区で、温度差なく見られるドラマを作ることは、本当に稀で難しいことなのだ。」とされている。
- 6) 舟橋和郎「北川悦吏子の酔わせるセリフ テレビドラマ評判記 連続第124回」『ドラマ』vol. 22, no. 5, 2000. 5, pp. 28-29, では、高視聴率の原因として、キャストの豪華さを指摘した『朝日新聞』2000. 1. 26, 夕刊, p. 10, の記事を紹介するとともに、脚本の「セリフが素晴らしい」ところと、「人物設定」をあげている。後者については、「常盤貴子を車いすの障害者にしたこと」「キムタクがラストに常盤に死化粧をしてやるくだりは感動的で美しいシーンであるが、作者は恐らくこの素晴らしいシーンでドラマの結末を飾ろうと思ってキムタクの職業を美容師に設定したにちがいない。」と指摘しているが、常盤貴子の職業が図書館員である点については、とくにふれていない。
- 7) たとえば、石田孝夫「楽しくやろう JLA! JLA に望むこと4」『図書館雑誌』vol. 94, no. 8, 2000. 8, p. 580, には、「最近トレンドィ・ドラマの主人公がカッコいい図書館員であったり、図書館がドラマの重要な場所になったりしている。」とある。また、種村エイ子「短大生と考えた NPO への図書館委託」『みんなの図書館』no. 277, 2000. 5, p. 33, では、「学生に『あんな図書館現実にあるはずなのに、どうして抗議しないの?』と質問されて、私もたじたじになった。」とある。
- 8) 吉田和彦「マンガの中に図書館の風景は見えないか—小田光雄「図書館のある風景」を読んで」『図書館の学校』no. 010, 2000. 10, pp. 30-31

- 9) 佐藤毅彦「映像メディアの中の図書館1992」『公立図書館の思想と実践』1993, 森耕一追悼事業会, pp. 292-309

『素顔のままでは』は、『ビューティフルライフ』の脚本を担当した、北川悦吏子をはじめててがけた連続ドラマであり、彼女がヒット脚本家になるきっかけでもあった。

- 10) 佐藤毅彦「図書館はどうみられてきたか 日本のミステリと図書館員—東野圭吾・法月綸太郎のケースについて」『甲南女子大学研究紀要』vol. 36, 2000, 3, pp. 155-179, にづくものである。

なお、このタイトルは、アン・ハドソン・ジョーンズ編著、中島憲子監訳『看護婦はどう見られてきたか 歴史、芸術、文学におけるイメージ』1997, 時空出版, を参考にしている。もっとも、看護婦と図書館司書とは、日本におけるその職業の浸透度に大きな差がある。たとえば、「小学1年生を持つ親6000人に聞いた将来子どもについて欲しい職業」(竹内 宏編『アンケート調査年鑑1998』1998, 並木書房, pp. 699-706)のアンケート調査では、女兒について、看護婦は、94年3位10.9%, 95年2位13.5%, 96年2位13.6%, 97年2位14.1%, 98年1位16.8%, となっているが、図書館司書は、94年から96年は集計ランク圏外, 97年40位0.1%, 98年38位0.1%, となっている。

- 11) 吉田和彦, 前掲, には「図書館が外からどういうふうに見えるのかを知る手がかりの一つとして、漫画・小説・アニメ・映画などを熱心に読んだりしている図書館関係者は、私の周囲を見回しただけでも数多くいます。」「従来は、そうした情報のほとんどが仲間内だけで語られるものに終わっていて、読者や市民に対して、まったく開かれていませんでした。いや、図書館界の中ですら情報が共有されていませんでした。」とある。

この文章の中では「そんな状況に風穴をあけた」として、飯島朋子『映画の中の図書館 Library Cinema』1999, 日本図書刊行会, が紹介されている。

なお、飯島朋子「本・本屋・図書館 in Cinema」が『図書館の学校』に連載されている(2000年10月現在)。

- 12) 北川悦吏子『ビューティフルライフ シナリオ』2000, 角川書店
北川悦吏子『ビューティフルライフ』ノベライズ: 百瀬しのぶ, 2000, 角川書店

2. テレビドラマの職業イメージと図書館

- 1) 村松泰子『テレビドラマの女性学』1979, 創拓社, p. 122

同書では、1974年10月から、東京地区で、夜8時以降に、放送されたドラマ57番組のうち、時代劇とアクションドラマ25番組を除く、32番組を

- 分析対象としている (p. 68)。
- 2) 小林 偉「テレビドラマ職業変遷史 ドラマの主役たちの職業はこんなに変わった!」『20世紀テレビ読本 踊る!お仕事ドラマ』2000, 同文書院, pp. 10-17
 - 3) 小松克彦「あとがき」『20世紀テレビ読本 踊る!お仕事ドラマ』2000, 同文書院, pp. 252-253
 - 4) 村松泰子, 前掲, pp. 128-129
 - 5) 村松泰子, 前掲, p. 224
 - 6) 村松泰子, 前掲, p. 227
 - 7) 黒田 勇「マスメディアと人権・社会教育」『生涯学習と計画』1999, 松籟社, pp. 213-235
 - 8) 向田邦子とテレビドラマの仕事をする機会の多かった久世光彦は, 久世光彦「私立向田図書館」『触れもせで 向田邦子との二十年』1992, 講談社, pp. 69-76, において, 次のように述べている。

「つまらないことでもあの人は面倒がらずに教えてくれた。それも簡潔にして要を得ていて, 付録までついているのだから図書館などへ行くよりよほどいい。二十年, 私立向田図書館のテレフォン・サービスにはずいぶんお世話になったものである。」(p. 70)

「私も向田さんも, 小学生のころから父親の本棚を手当たりしだいに読んでいた。大人の目を盗んで, それだけに結構気を入れて読んだものだ。そのころに本の面白さを知って, それからは図書館に通ったり, 乏しい学生のお小遣いで文庫本を買ったり, 十年以上も本の虫みたいになっていると, あるとき本はもういいと思ってしまうのである。」(p. 75)
 - 9) 「向田邦子名作劇場 ホームコメディ 阿修羅のごとく 和田 勉・演出 平成十二年十月・十一月」(パンフレット)の「あらすじ」には, 「三女の滝子は図書館勤務の化粧気のないお固いハイミス」と書かれている。ただし, ストーリーの中では, 図書館については, ほとんど言及されない。
 - 10) 向田邦子「女正月」『向田邦子 TV 作品集 1 阿修羅のごとく』1981, 大和書房, p. 9

NHK による再放送の後に刊行された, ノベライゼーション, 向田邦子原作『阿修羅のごとく』(向田邦子氏の放送台本を中野玲子氏が小説化したもの) 1999, 文芸春秋, p. 9, での同じ場面の描写は, 次のようになっている。「竹沢滝子, 三十歳, 独身。区立図書館の司書をしている。図書館は看板の文字も読めないほど古ぼけ, 見捨てられたオールドミスのように寒々とした建物だ。」

- 11) 向田邦子, 前掲, p. 53
- 12) 向田邦子, 前掲, pp. 30-31
- 13) 蕪木和夫『TV ドラマの鉄人 BIG 4』1995, プレーン出版, p. 109
- 14) 『讀賣新聞』1997. 4. 7, p. 32, 脚本は寺田敏雄。
- 15) 原作・脚本・小松江里子, ノベライズ・豊田美加, 『青の時代』1998, 講談社
- 16) 脚本・遊川和彦, ノベライズ・島崎ふみ『魔女の条件』1999, ソニー・マガジンス
- 17) 佐藤毅彦「フィクションの中の貸出方式 映画「Love Letter」「耳をすませば」の問題点」『羽衣学園短期大学紀要』(文学科編), vol. 32, 1996. 1, pp. 1-19, の中で, こうした事例について, 分析している。
- 18) 東野圭吾の作品に登場する図書館・図書館員については, 佐藤毅彦「図書館はどうみられてきたか 日本のミステリと図書館員—東野圭吾・法月綸太郎のケースについて」(前掲)で扱っている。
- 19) 『歌劇』no. 883, 1999. 4, p. 72, において, 作・演出担当の石田雅也の発言。
- 20) 田辺麻紀・長峰洋子『偏愛宝塚夢分析』1999, 大栄出版, p. 125
 このキャラクターについては, 「この図書館の場面のサンドリーヌの写真がよく売れたらしく, 千穂楽間近の日には売り切れていた。」(p. 125), 「宝塚の月影瞳が演じているからこそ『お笑い系の美人』ですんでいるんであって, 私をはじめ巷の女性が同じことをしたらただの『お笑い系』になり果てるだろう。」(pp. 127-128) などと紹介されている。
- 21) 「公開アンケート 2000 vol. 2 月影瞳」『宝塚 GRAPH』no. 635, 2000. 4, pp. 38-40, では, 「好きだった役」で2位を占め, 「トップ娘役の中で, この役ができるのはグンちゃんだけ」(p. 38) という意見があった。また, 「自分が生まれ変わるとしたらこの役」では, 1位で, グンちゃん(引用・注: 月影瞳の愛称)からの感想として「サンドリーヌは, 皆さん図書館の場面のサンドリーヌが好きだったんでしょうね(笑)」(p. 40) とのコメントがあった。
- 22) 堀井憲一郎「ドラマの中の職業≡旬のお仕事? ホリイのずんずん調査 236」『週刊文春』2000. 2. 24, p. 78
 「暗くなるまで待てない! CINEMA おすすめこの1本!」『ダ・カーポ』no. 441, 2000. 3. 15, pp 110-111, によると, 映画に関しては, 1999年度に公開された作品の中で, あらすじから, 主人公の職業が判明するものをカウントすると, 邦画(全98作品中)では, ヤクザ(15)無職(7)ヒットマン

(5) 中高生 (5), などが多かったことが示されている。

3. 間違いだらけの『ビューティフルライフ』

- 1) カトリーヌあやこ『すちゃらかTV! 2』1996, 角川書店, p. 94, において, 北川悦吏子は, カトリーヌあやことの対談で, 難病を扱ったドラマ『愛と死を見つめて』(1964年放送)について見た記憶があることを, 述べている。

また, 北川自身も病弱であったことを, エッセイに書いている。たとえば, 北川悦吏子『温かい血』『恋愛道』1996, マガジンハウス, pp. 26-28, 「あの(引用・注: 大学2年)頃, 私は持病があって(実は今もそれはあるんだけど), 月に1回, 病院に通っていた。」北川悦吏子「信じる力」『恋のあっちゃんぶりけ』1999, マガジンハウス, pp. 28-30, 「子どもの頃は丈夫だったんだけど, 高校, 大学, OL初期が, 一番, 体が弱かったのである。」「私は, 大学卒業時には, 就職もままならない, と言われた。」など。

さらに, 北川悦吏子「ロングインタビューで明かす創作の視点と方法」『ドラマ』vol. 18, no. 5, 1996. 5, p. 23, では, 「腎臓が悪いんで無理しちゃいけないと高校のときから言われてる。悪くなる可能性のある病気なので。」と述べている。

- 2) 「向田邦子賞」は, 「テレビドラマ界に多くの功績を残した脚本家・向田邦子さんの偉業を偲び, テレビドラマの質的向上, 発展を目的に, 1983年に設けられた。」「優れた脚本家を表彰する」ものである。(『ドラマ』vol. 22, no. 6, 2000. 6, p. 12)

「橋田賞」は, 「広く大衆に支持され, 感動を呼び起こした, 芸術性豊かな完成度の高い番組・作品, もしくは人」を顕彰する」ものである。(『ドラマ』vol. 22, no. 6, 2000. 6, p. 47)

また, 向田邦子賞の受賞に際し, 久世光彦は, 『ビューティフルライフ』と北川悦吏子について, 次のようにコメントしている。

久世光彦「死のある風景 145」『週刊新潮』2000. 5. 4・11, pp. 220-221, 「北川悦吏子のこの作品での《手口》は, いい意味で見事な《術》だった。今年の《向田邦子賞》はこの人に決まったが, 思い出してみれば, 向田邦子という人も, もっと大人っぽくはあったけれど, 《手口》を使う名人だった。」

- 3) 佐藤毅彦「映像メディアの中の図書館1992」(前掲)
- 4) 北川悦吏子『ビューティフルライフ』ノベライズ: 百瀬しのぶ, 2000, 角川書店, p. 6
北川悦吏子『ビューティフルライフ シナリオ』2000, 角川書店, p. 6
- 5) 北川悦吏子『ビューティフルライフ シナリオ』2000, 角川書店, p. 184

- 6) 北川悦吏子『ビューティフルライフ』ノベライズ：百瀬しのぶ，2000，角川書店，p. 162
- 7) 北川悦吏子『ビューティフルライフ』ノベライズ：百瀬しのぶ，2000，角川書店，p. 79
4. 『ビューティフルライフ』をめぐる言説
 - 1) 『毎日新聞（大阪本社版）』2000. 3. 21，p. 17
 - 2) 『週刊 TV ガイド』に「The Brightest Moment in Beautiful Life」連載
『ザ・テレビジョン』に「北川悦吏子 イヌも歩けばビューティフルライフ」連載
たとえば，北川悦吏子「北川悦吏子 イヌも歩けばビューティフルライフ」『ザ・テレビジョン』2000. 2. 19～25，p. 47，には，障害をもつ友人とメールの交換をしたことが記されている。
 - 3) 「若者の生活志向にピタリ TBS系『ビューティフルライフ』ヒットの理由 日曜9時の視聴者開拓」『朝日新聞』2000. 1. 26，夕刊，p. 10，では，「実力が認められない美容師と，図書館に勤める車いすの女性との恋を描く。」とされ，「車いすの視点は織り込むが，福祉や社会派ドラマではなく，あくまでも普遍的でオーソドックスなラブストーリー」との北川悦吏子のコメントが紹介されている。
 - 4) たとえば，『「五体不満足」の著者 乙武洋匡さん 日本外国特派員協会で講演』『スポーツ報知』2000. 3. 2，p. 31，では，「妹が障害者というだけで兄の縁談が破局する話があった。」「乙武さん 早稲田大学卒業式」『スポーツニッポン』2000. 3. 26，p. 27，では，「『素敵なドラマですね』とすっかりハマっている感じ。『キムタクの常盤さんへの接し方がすごくナチュラルで，まさに“これだよ，僕が言いたかったのは”という感じです』と絶賛。」などのコメントが紹介されている。
 - 5) 「視聴率稼ぐ美しき悲恋 木村拓哉主演の人気ドラマ『ビューティフルライフ』」『朝日新聞』2000. 3. 25，p. 25，における乙武洋匡のコメント。他に，橋田寿賀子，麻生千晶，カトリーヌあやこ，のコメントが掲載されている。
 - 6) ナンシー関「ナンシー関 テレビ消灯時間」『週刊文春』2000. 4. 6，p. 172
キャストについては，「メディア裏最前線 最高視聴率獲得した『日曜劇場』の裏番組事情」『噂の真相』2000. 3，p. 110，で，「キムタク&常盤コンビの，カリスマ美容師と，車いすの女性のロマンスとくれば，取るべくして取れた数字だろう。」「だが，このキャスティングができるまでに，ご苦労があったのでしょ。」と指摘されている。
なお，細田正和『テレビのお約束 芸能記者の取材ファイル』1998，共同

通信社, p. 112-113, には、「数字争いの短期決戦においては、キャストینگこそが、まさにキャストینگボートをにぎっている」との表現がある。

- 7) たとえば、「絶対見逃せない! 史上最強の恋愛ドラマ『Beautiful Life』の魅力徹底分析 木村拓哉に直撃! 柊二と杏子, ふたりの恋と幸せの行方は?」『JUNON』vol. 28, no. 4, 2000. 4, pp. 7-11, では、木村拓哉をはじめ出演者、製作者へのインタビューを掲載している。「『ビューティフルライフ』撮影現場の『ON』と『OFF』に密着 木村拓哉の不思議物語」『ポポロ』vol. 9, no. 6, 2000. 4, pp. 4-8, ではこの番組における木村拓哉が特集されている。

また、「木村拓哉『ビューティフルライフ』超ヒットの舞台裏『日経エンタテインメント!』no. 37, 2000. 4, pp. 42-44, では、木村拓哉が出演したドラマに関するデータが掲載され、「天下無敵の視聴率男ができあがるまで」が分析されている。

木村拓哉が演じた、図書館と関係のある主なキャラクターには、次のようなものがある。

『あすなろ白書』(1993年 フジテレビ) 大学生の役、図書館で勉強するシーンがある。

『協奏曲』(1996年 TBS) 建築設計家の役、外国の大学図書館を設計する。

『Gift』(1997年 フジテレビ) 記憶喪失の“届け屋”の役、最終回に図書館でのシーンがある。

- 8) 杉原秀一「北川ドラマの醍醐味について」『ドラマ』vol. 22, no. 6, 2000. 6, vol. 22, no. 6, pp. 80-84
- 9) 「常盤貴子 キムタク 大人気ドラマ『ビューティフルライフ』に名作『ある愛の詩』バクリ疑惑」『週刊アサヒ芸能』2000. 2. 10, pp. 206-208, では、「主人公の2人が出会う場所が図書館だった」「ヒロインが重い病気を患っている」「主人公の男の子が大金持ちの御曹司」「男の家族が反目し合っている」などの設定が、1970年度アカデミー賞受賞映画『ある愛の詩』にそっくりであり、「常盤は病気のため下半身が不自由。実家は酒屋で、図書館司書として『宮の森図書館』に勤めている。」「テレビ情報誌記者もこう言う。『貸し出しカウンターの受付にいるのが女のほうで、本を借りるのが男、という点は同じですね。それと、本を借りる際に2人がちょっとした言い争いをして、それが知り合うきっかけとなる、というシーンも酷似しています』」とされている。
- 10) 林真理子「林真理子 今夜も思い出し笑い no. 716 せちがらい」『週刊文

春』2000. 2. 17, pp. 60-61

ヒロインの友人が、図書館の「時間外返却ボックス」に返却された資料を整理しながら「やっと返ってきた、ちびまる子ちゃんエッセイ」と発言するシーンがこれに近い（第1回放送）。

- 11) 「大人気ドラマ『ビューティフルライフ』に便乗しようぜ特集 出会いのスポットとして今、とても熱い ビューティフル! 図書館ナンパ大作戦」『週刊プレイボーイ』2000. 3. 14, pp. 64-67, は、「図書館を出逢いの場だとは認識していなかった。むしろナンパ禁断の地のような気がしていた。」という内容。この記事のライターにインタビューされた図書館員は「20年以上、司書をやっていますが、利用者と司書が付き合ったという話は聞いたことがありません。受付に座っている姿はヒマそうに見えるでしょうが、実は図書館では裏方の仕事がメイン。3Kの肉体労働で余裕なんかないんですよ(H市図書館司書)」と答えている。そこでライターは「司書ネライのナンパは確率が低いのかも。その上、常盤貴子似どころか若い司書なんて減多にないことが何館も回るうちに判明した。」「発想を転換することしよう。図書館に来ている利用者のほうを狙うのだ。」と方向を転換している。
- 12) 「実録・広尾図書館恋愛物語 あこがれの慶応BOYを逆ナンパしようと女の子たちが殺到!」『プチ seven』1989. 10. 1, p. 55, では、都立中央図書館・通称広尾図書館が「昔は『絶対慶応ボーイとお友達になれる場所』として有名」であり、「現在は“ボーイミーツガール”(下品に言えばナンパね)の定番スポットとなっている高校生の必修科目的プレイスなのです。」と紹介されている。

酒井順子『マーガレット酒井の女子高生(リセエンヌ)の面接時間』1996, 角川書店(文庫), p. 22, には、「図書館に行って勉強したりしないの? ほら、一時、広尾の図書館(都立中央図書館)が大流行したことがあったでしょ。」との発言がある(本書は『オリーブ』に1985年から1989年に連載された「オリーブ少女の面接時間」を加筆訂正の上、文庫化したもの)。
- 13) 林真理子「マリコのここまで聞いていいのかな ゲスト・脚本家: 北川悦吏子」『週刊朝日』2000. 3. 17, pp. 40-44
- 14) 山田太一『山田太一作品集4』1985, 大和書房, pp. 193-239
- 15) 北川悦吏子(聞き手 編集部・辻万里)「受賞記念インタビュー『ビューティフルライフ』の書き方」『ドラマ』vol. 22, no. 6, 2000. 6, pp. 14-23

『ドラマ』2000年6月号は「第18回向田邦子賞受賞記念 北川悦吏子-

特集』として編集されている。

- 16) 編集の段階で、図書館についての発言がカットされた可能性もあるが、その場合でも、図書館は重視されていないという事実は変わらない。
5. 『ビューティフルライフ』の中の図書館員
- 1) 伊藤敏朗「映像表現における図書館と図書館員像に関する論考」(前掲)
 - 2) このときの状況について、シナリオ p. 13, では「お客さん少ない。カウンターで頬杖ついた杏子(引用・注:常盤貴子の役名)。横のサチ(引用・注:友人の女性図書館員の役名), カウンターの下でマニキュア塗っている。杏子, 横目でチラリと見るが, 何も言わない。(いつものことってことでしょう)」となっている。ノベライゼーション p. 9, では「翌日の昼下がり, 図書館はガラガラだった。杏子は車いすでサチのそばに行き, 話しかける。サチはフロアに出て, 自分の読みたい本を本棚から取り出して読んでいた。」となっている。実際に放送されたものは, 後者に近い。ドラマの制作者に, 「図書館員は利用者がいないときに, このように行動している」とみられていることを示している。
 - 3) シナリオ p. 25, では「ボーッとした顔をしている。』, ノベライゼーション p. 20 では, 「カウンターでぼーっと絵本を読んでいるところだった。」となっている。
 - 4) シナリオ p. 119, ノベライゼーション p. 106, では, いずれも「区立図書館」となっている。
 - 5) <http://www.tbs.co.jp/b-life/qa/qaread2.html>
 - 6) シナリオ p. 6, では, 「区立宮の森図書館」(けっこう大きな図書館), ノベライゼーション p. 6, では, 「図書館司書として, ここ, 区立宮の森図書館に勤めている」となっている。
池沢 昇「東京23区の司書職廃止の経過報告」『みんなの図書館』no. 234, 1996. 10, pp. 40-45, によると, 現実には, 東京23区の区立図書館では, 「九六年六月に, 二十三区の職種名から『司書』が廃止されることが決定された。」という状況にある。この報告が掲載されている『みんなの図書館』1996年10月号には, 「特集『司書職』はいらないの!? 東京23区の無責任人事」が掲載されている。なお, 「らんだむ批評 司書の役割は大きいのに」『毎日新聞』1996. 3. 8, 夕刊, p. 10, は, この間の事情について, 簡潔に紹介している。
 - 7) シナリオ pp. 163-164, ノベライゼーション p. 146, とも, 細かい部分に違いはあるが, ほぼ同じ内容である。
なお, 『ザ・テレビジョン』2000. 2. 12-18, p. 14, では, 「『やっぱり住

む世界が違う』と仕事のことや、自分の足が不自由なことに卑屈になる」と紹介されている。

- 8) シナリオ p. 198, ノベライゼーション p. 174, ともほぼ同じ表現。
 9) シナリオ p. 223, ノベライゼーション p. 196, ともほぼ同じ表現。
 10) 村松泰子『テレビドラマの女性学』1979, 創拓社, p. 128-129 (前掲)
 11) シナリオでは、図書館カードをチェックし、水酸化ナトリウム系の本ばかりならんでいるカードから「沖島柊二」(木村拓哉の役名)を知る (pp. 19-20)。ノベライゼーションでは、カウンターの本の上にカードが投げ出される。『沖島柊二』だ。(p. 12)というシーンがあって、そのあと「沖島柊二の貸出状況を検索して調べていた」(p. 15)という行動をとっていたことになっている。実際に放映されたものは、後者に近いが、この際、貸出記録をコンピュータで処理しているシーンでは、書名-貸出者-返却日、が、具体的にカウンター上のモニターの画面に表示されている(第1回放送)。プライバシーに配慮すれば、他の利用者の目にふれる可能性のあるカウンター上のモニターには、こうした具体的な表示が現れないようにしておくことが考えられる。

また、大学図書館の女性職員が、男子学生の利用者情報を悪用しようとするストーリーが、北川悦吏子の脚本でドラマ化された、柴門ふみ『あすなろ白書 第Ⅱ部 1』1993, 小学館, にみられる。ただし、原作の該当部分は、テレビドラマには、使われていない。

- 12) 木村拓哉の母親役と思われる中年女性が図書館にやってきて、「沖島柊二(引用・注:木村拓哉の役名)って男の子、ここに来ますか?」と図書館員に尋ねるシーンがある(第2回放送)。そのあとすぐに、場面が転換するので、どう対応したは不明。シナリオ p. 47, ノベライゼーション p. 39, でも、ほぼ同じ表現。

その直後に、木村拓哉と会った常盤貴子は、「この間、女の人、来たよ。和服着た。」(第2回放送)と話してしまう。シナリオ p. 53, ノベライゼーション p. 46, でも、ほぼ同じ表現。

そのあと、この中年女性が図書館で木村拓哉を待ちぶせしていて、面会するシーンがある(第2回放送)。シナリオ p. 63, ノベライゼーション p. 55, でも、ほぼ同じ表現。図書館員の対応が、そうした行動の根拠となっているかどうかは不明。

- 13) たとえば、法月綸太郎「リターン・ザ・ギフト」『法月綸太郎の新冒険』1999, 講談社, pp. 263-265, には、警察の捜査に毅然とした態度で対応する図書館員が描かれている。

- 14) 有馬哲夫『『エイモス・ン・アンディー』のテレビ化と黒人問題』『テレビの夢から覚めるまで——アメリカ 1950 年代テレビ文化社会史』1997, 国文社, pp. 27-51
- 15) 川竹和夫他『外国メディアの日本イメージ』2000, 学文社, pp. 1-2

6. おわりに

- 1) 『心療内科医・涼子』に現場医師が大ブーイング』『サンデー毎日』1997. 12. 7, pp. 155-157
- 2) 『練馬テレビ事件・『凶水系』をめぐる』日本図書館協会図書館の自由に関する調査委員会編『図書館と自由第 14 集 図書館の自由に関する事例 33 選』1997, 日本図書館協会, pp. 140-147 なお、佐藤毅彦「フィクションの中の貸出方式 映画「Love Letter」「耳をすませば」の問題点」(前掲)において、こうした事例について扱っている。
- 3) 伊藤敏朗「映像表現における図書館と図書館員像に関する論考」(前掲)
- 4) 『『私の青空』に感謝状 日本栄養士会』『朝日新聞 (大阪本社版)』2000. 10. 10, 夕刊, p. 4
- 5) 『読賣新聞 (大阪本社版)』2000. 10. 6, p. 1 この記事は、一面のトップに掲載されている。

その後、『読賣新聞 (大阪本社版)』2000. 10. 12, p. 19, には「解説と提言」のページに「問題教師 教壇から排除へ 公立への不信背景 判断は透明公正に」という、「社会部 小松夏樹」による署名記事が掲載された。ただし、この文章では、配置転換先としての「県立の図書館」などについては、言及されていない。

また、『図書館雑誌』vol. 94, no. 11, 2000. 11, p. 886, によると、日本図書館協会では、6 日の記事に対して文部省に確認したところ、「文部省としては上記のようなことを述べた事実はなく、教育改革国民会議で問題の検討はしているが正式に決まったことではない」との回答を得た。読賣新聞に対しては、「同紙記者宛に、13 日、事実確認に関する文書を送付し」「県立図書館における児童サービスの現状と重要性に触れ、県立図書館が『問題教員』の配転先で良いのかについても追及するように提言した。」が 10 月 30 日現在で返信等はない、とのことである。